

古代エジプトの神妻 1: その黎明と変容

イアフメス・ネフェルタリとインスの場合

愛知県立大学 多文化共生研究所 客員共同研究員 深谷雅嗣 (Masashi FUKAYA)

要約(400字)

テーベの主神アメン・ラーの神官組織は第三中間期初めの第 21 王朝になって肥大化を極め、その序列の頂点にいた大司祭は王を僭称するようになる。その娘たちもまた王族にしか許されなかった即位名を有した。ついには、大司祭まで兼任した女性もいる。しかし、彼女たちは単なる名誉称号に甘んじたわけではなかった。アメン・ラーの配偶者「神妻」として儀礼をつかさどり、専属の執事職が設けられるなど、その家政機関は小さくなかった。何よりも、彼女たちは独身を貫き、王朝が交代しても引退を迫られることなく、終身の女性神官として職務を全うした。本稿では、それより以前の新王国時代(第 18 王朝～第 20 王朝)に神妻の称号が女性王族にどのように継承されたのかを考察し、世俗と宗教の間に身を置いた女性たちの姿を追ってみたいと思う。また、「継承」、「相続文書」、「祭」の 3 つを手がかりに、史料の新しい解釈も試みたい。

キーワード

アメン、神官、継承、相続文書、祭礼

はじめに

エジプトは神政一致の絶対君主国家であり、民衆が王に隷属していたという言説は一部で未だに語られる。その背景には、ピラミッドなどの石造建築物があまりにも巨大で、人知が及ぶのを拒むように今もそびえているからかもしれない。極めて緻密な埋葬副葬品なども、質的、量的に見て他の古代文明を凌駕し、見る者の心を奪う。それらが完成する長い工程や労力を考えると、途方もない資源が現代とは異なる方法で投入されたと想像する人もいよう。

しかし、3 千年の間持続したエジプト文明に生きた数千万、数億もの人々が常に抑圧された状態で生活したとは考えにくい。独裁的な集団は期を待たずして自ら崩壊することを私たちは経験的に知っている。だからといって、ピラミッドの建造は公共政策であり、民衆に食い扶持を与えたという最近の社会学的言説を容認することもまた難しい。その左証となる直接的史料は存在しないのだ。そして、これは一見、人道的に歓迎できる説明ではあるが、現代人の願望の投影でしかない危険も孕む。世界観、死生観、時間に対する認識が私たちとは大きく異なる彼らを理解するとき、モラルを同じ枠組みで語ることに相当の注意を要する。とはいえ、どんな言説であれ、そこには人間の良心や自由意志を前提とした文字史料の読解が求められるだろう。ピラミッドの大きさや神殿の美しさだけで語ってはいけないのだ。国家の安寧とは言わずとも、家族の健康を願ったり、自己肯定を求めたりする祈りの場はあったに違いない。その大きな一端を担ったのは宗教だった。王が他界するたびにピラミッドを建立する伝統は、民衆に鞭打つだけではおよそ維持できないだろう。彼らに建造に参加する意思と願望がなければなら

ない。これまでの研究に欠けるのは、ご利益に預かるという感覚に似た信仰上の動機や、地方から参集した労働者をまとめる講のような存在などを想定する宗教社会学的視点だろう。特に、新王国時代以降の神殿には多くの人を収容できる空間が発達し、神輿行列が市街地を通る祭礼様式も整った¹。千数百年の間に積み重なった伝統と公共での大々的な催行は、人々の帰属意識を刺激したに違いない。優秀な為政者ならば、これを大いに利用して民心を掴むより他に良い手立てはないと考えただろう。

本来ならば、宗教の公共性と文明の持続性をより深く検討したいところだが、本稿では両者に共通する祭礼という場に限って、その普遍性とそれに関わる女性神官について論じたい。例えば、至高神アメン・ラーのためにテーベで挙行されたオペト祭は、ナイルの洪水が再来する時期に神の再生を重ねて祝われた。第 20 王朝のラムセス 3 世の時代には最長で 27 日間続いたことが知られるが、その間に民衆が神輿に対して神託を乞う事例が少なからず伝わっている²。しかも、盗難に関するある事例では、神託に不服を申し立て、別の祭礼で再び託宣を求めたことが判明している³。そのような機会は少なくとも 3 度与えられたが、申立人は最終的に鞭打ちの刑に処せられている。判決はおそらく事前に取り決められるなど、高度に様式化されていたとはいえ、司法の機能を兼ねた神輿行列は衆人環視で行われた。その場には多くの証人が居合わせたのだ。また、神託による高官や神官の任命承認も同時に行われた。他の祭礼も異なるあり方で社会機能を有したと考えられる⁴。オペト祭は、そんなエジプトの祭礼の中で顕著な権威と名声を保った。混乱期の第 3 中間期になって、エジプトが異民族に支配されたときもこの祭は続く。ヌビア人の王朝(第 25 王朝)を打ち立てたピアンキは、ナイル沿いを北上して各都市を攻略する途中、オペト祭に合わせてテーベに立ち寄っている⁵。このとき、自軍の兵に向かって次のように呼びかけた。「汝は知っているはずだ。アメンが我々を差し向ける神であることを。汝らがテーベに入るとき、カルナク神殿の前にあるとき、汝らは水に入り、自分を川で清めよ。汝らは良い布に身を包み、弓を外し、矢をほどけ。上官に強者であると自慢させることなきように。彼(アメン)以外に強い者は居ない」。テーベに対するピアンキの敬意はこれに留まらない。彼は自分の姉(妹?)と娘の 2 人をアメンに奉仕させるために神官としてテーベに残し、自分はヌビアに引き返している。彼の孫娘もまた女性神官候補となるが、彼女たちはエジプト人王朝が復活した第 26 王朝になっても、現職のままだった(これについては次論「古代エジプトの神妻 2」で詳述する予定)。新王朝を樹立したプサメティコス 1 世は自分の娘ニトクリスを女性神官に加えるとき、「在任の後継者を追い出すことはしない」と念を押して配慮を

¹ アメンの神輿の登場はアメンヘテプ 1 世(カルナク神殿聖舟祠堂:PM II², 63-4)、アメンの船ウセルハト建造はイアフメス(カルナク神殿ステラ:PM II², 179)、アメンの神託はハトシェプスト(デール・エル=バハリ神殿:PM II², 347 (14))、民事に関わるアメンの神託はラムセス 4 世(大英博物館所蔵パピルス P. BM EA 10335)、神格化されたアメンヘテプ 1 世の神託はシプタハ(O. DeM 10051 verso: Grandet 2006, pp. 55-6, 241)、神格化されたアメンヘテプ 1 世のワブ神官は第 18 王朝(TT 261, TT A. 8)の時代に初例が確認されている。

² Fukaya 2020, pp. 34-5.

³ 大英博物館所蔵パピルス P. BM EA 10335 (Blackman 1925; *KRI* VII, 416-8)。

⁴ Fukaya 2007.

⁵ カイロ考古博物館所蔵のピアンキの戦勝記念ステラ Cairo JE 48862, 47086-9, ll. 12-3, 26 (Jansen-Winkel 2008, pp. 337-50)。

見せている⁶。ニトクリスのテーベ下向はオペト祭直前だったので、彼女の任命は本祭で行われた可能性が極めて高いが、その後この祭礼は記録から徐々に姿を消す。しかし、ギリシャ・ローマ時代になっても洪水季第2月19日はオペト祭の日として記憶され、コプト・キリスト教時代になると、パオピ(オペト)の祭として語り継がれた。相当な変容はあったものの、多くの巡礼者を集めたようだ⁷。さらに、イスラーム化が進むと、オペト祭の目的地だったルクソール神殿には聖人アブー・エル＝ハッガーグの墓廟が建立され、今に至るまで彼のための生誕祭が毎年行われる。この祭の行列と古代のオペト祭の類似は、以前から指摘されてきた。これが妥当かどうか検証する必要は大いにあるが、仮にそうだとすれば、オペト祭は形を変えながら実に3500年以上継続していることになり、人類史上特筆すべき事例と言える⁸。

さて、前述した女性神官とはアメン・ラーの配偶者「神妻」のことだが、この称号もまた時代とともに大きく変容した。最終的には未婚の女性王族が終生務める女性最高位の神官職となり、専任の執事職が設けられるなど、その家政機関は大きく発達した⁹。とはいえ、彼女たちが実際に儀礼執行や実務を担ったのか、あるいは権威の象徴として神殿に住んだだけなのか、容易に結論付けられない¹⁰。俗僧という言葉があるように、エジプトにも世俗に身を置きながら神官の称号を持つ者は多かったと考えられ、女性も同様だったようだ。その意味で、ヘロドトスが「女性は男神にも女神にも仕えることはできない。男性は男神だろうと女神だろうとすべての神に奉仕する」と伝えるのを簡単に誤認と切り捨てることはできない¹¹。伝統的に男性が最高位の「大司祭」を担ったのがアメン・ラーの神官組織だったが、極度に肥大化したその官位序列において、女性として、外国人として、あるいは父祖に取り残された者として、彼女たちが果たした役割を検証し、そこから透けて見える当時の社会の多様性や持続性を考察するのが、本論の目的である。彼女たちが活躍したのは、紀元前16世紀から紀元前6世紀までの千年の期間にまたがるため、内容を二分した。このため、本論を「古代エジプトの神妻1」とし、新王国時代の神妻イアフメス・ネフェルタリとイシスの2人に焦点を当てる。続く「古代エジプトの神妻2」では、第三中間期(第21王朝～第25王朝)から第26王朝までの神妻を取り上げるつもりだが、別に発表する予定である。

1. イアフメスの正妃イアフメス・ネフェルタリ

イアフメス・ネフェルタリ(あるいはアハメス・ネフェルタリ)は、新王国時代の最初の王朝である第18王朝の礎を築いた王イアフメス(紀元前16世紀後期)の正妻であり、2人は同母同父(母イアフホテプ、父セケンエンラー・タア)の兄妹、あるいは弟姉だった。彼らはイアフメス・アメンヘテプとアメンヘテプという2人の王子をもうけたが、前者は夭逝したため、後者がアメンヘテプ1

⁶ カイロ考古博物館所蔵のニトクリスの神妻叙任ステラ Cairo JE 36327, l. 3(Caminos 1964)。

⁷ Wolf 1931, pp. 74–5.

⁸ オペト祭の歴史は中王国時代まで、さらに数百年遡る可能性もある(Fukaya 2015)。

⁹ カイロ考古博物館所蔵の神妻主席執事イビの立像 Cairo JE 36158(Graefe 1994)。

¹⁰ この点に関して、新王国時代以前の女性神官としてもっとも多く記録が残るハトホル神官(Hm.t 1w.t-Hr)は、大いに参考になる。この称号は古王国時代中期から中王国時代初期の間のみ確認され、それ以降は単なる名誉称号のように変化する(Gillam 1995)。

¹¹ ヘロドトス、『歴史』、II, 35.

世として王位を継いだ。彼女が神妻に叙任されたことを記念するステラには、イアフメス・アンクが長男として描かれているので、イアフメスの治世初期に建立されたと考えられる(図1)。残念なことに、碑文中の治世年は欠損している。イアフメスとアメンヘテプ1世はともに第18王朝の始祖と見做され、それ以前を第17王朝とすることが一般的だが、両王朝は同じ家系である。異民族ヒクソスを駆逐しエジプト全土を統一するまでを第17王朝とし、テーベ地域の地方勢力と位置付けられる。後代になると、アメンヘテプ1世は神格化されて崇敬を集めたが、彼の母イアフメス・ネフェルタリも国母のような存在として比類ない信仰が寄せられた。

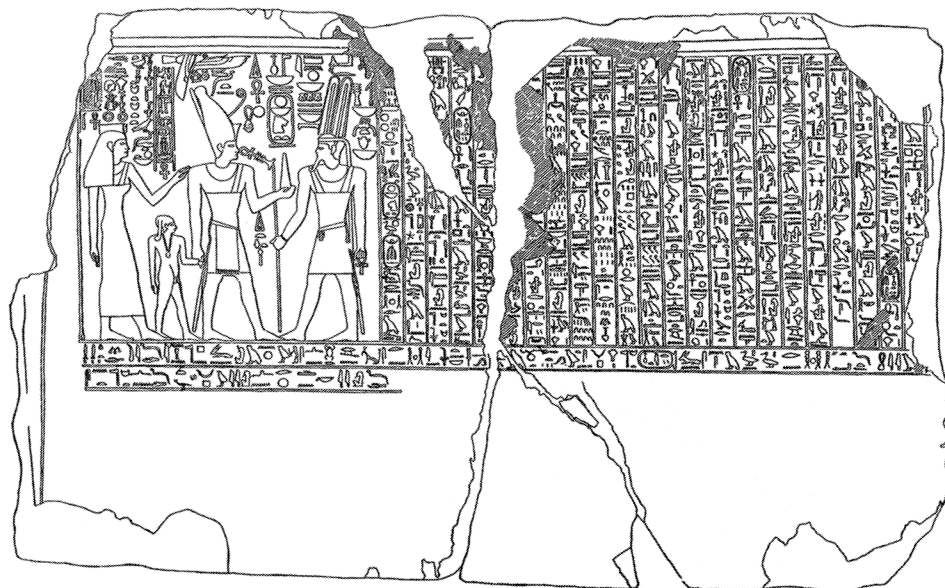


図1. イアフメス・ネフェルタリのステラ
第18王朝、カルナク神殿で発見

(I. Harari, "Nature de la stèle de donation de fonction du roi Ahmôsis à la reine Ahmès-Nefertari", *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 56 (1959), p. 202, pl. 2 より)

このステラは、テーベ(現ルクソール)の主神殿であるカルナクから発見された。アメン・ラーを祀るこの巨大な神殿は、歴代の王によって増改築が繰り返され、拡張していった。その東西軸と南北軸は延長され、巨大な「」型を成した。その結節点に第18王朝のアメンヘテプ3世(紀元前14世紀前半)は神殿の新たな玄関として、塔門を建造することを決める。そこには、すでに前王たちの建造物が林立し狭隘だったので、正門にふさわしい大きな塔門を建造するには、古い記念碑をいくつか取り壊す必要があった。その一つが、ここで紹介するステラだった¹²。正確に述べると、それは単独の記念碑ではなく、建物の壁を飾るレリーフだった可能性が高い。その他の石塊とともに、アメンヘテプ3世の塔門(今日の第3塔門)の北翼を建造する石材として再利用され、それ以来ずっと日の目を見ることはなかった。20世紀初めにこの塔門が調査のために解体されたとき、中から古い記念碑が多く発見されたが、繋ぎ合わせると小さな建物が復元できる事例もいくつかあった。横に長いイアフメス・ネフェルタリのステラは3つ

¹² PM II², 73.

に分断され、それぞれ違う年に刊行された。長らく、カルナク神殿の保管所に放置されていたが、現在はルクソール博物館が収蔵している可能性が高い。しかし、その収蔵番号はおろか、石材の種類や大きさも不明である。

3つの断片をまとめて考察を行なった研究は、I. Harariによる "Nature de la stèle de donation de fonction du roi Ahmôsis à la reine Ahmès-Nefertari", *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 56 (1959), pp. 139–201 が最初である。写真、図版、仏訳が載る。また、T. Logan, "The *jmyt-pr* document: Form, function, and significance", *Journal of American Research Center in Egypt* 37 (2000), pp. 49–73 は、英訳を提供する。M. Gitton, *L'épouse du dieu, Ahmes Néfertary: Documents sur sa vie et son culte posthume*, Paris, 1975, pp. 7–11 にも若干の論考が加わるが、銘文の解読の助けとはならないだろう。

ステラの左の3分の1はレリーフが施され、アメン・ラーに向かってイアフメスとイアフメス・ネフェルタリ夫妻が描かれる。彼らの間には幼子である長男イアフメス・アंकがいる。王と王子は手を繋ぎ、王妃は王の肩に左手を添える。右半分には23行の縦書き碑文が記され、その続きの2行が横書きでステラ下部を占める。碑文はイアフメス・ネフェルタリへの称号付与とそれに伴う相続書と宣誓を記録する。彼女に新たに与えられたのは、Hm.(t)-nTr 2-nw n.(t) lmn 「アメンの第2神官」の地位だった。大司祭に相当する第1神官は、伝統的に男性が担い、当時はジェフウティ¹³とミンメンチュウ(TT 232の墓主か?)¹⁴という人物が務めていたと考えられる。このとき、イアフメス・ネフェルタリは「神妻」の称号も同時に手に入れたか、それ以前から有していたと考えられる¹⁵。彼女の有した称号は、「王の偉大な妻」、「王の娘」、「王の姉(あるいは妹)」、「王の母」、「パアトの偉大な一員」など多くあったが、「神妻」が優先的に記録されることが多い。スカラベなどの小物に至っては、ほとんどが神妻と記す¹⁶。テーベのアメン神殿に属する女性神官に関しては、少なからず論考があるので¹⁷、ここでは詳しく述べないが、高位と考えられる主要な称号は次の通りである。

𓆎 Hm.t-nTr 「神妻」

𓆎 dwA.t-nTr 「神の崇拜者」


¹³ 葬送用コーン(MMA 13.180.60–13.180.64)。


¹⁴ 葬送用コーン(UC 37666)。


¹⁵ カルナク神殿のアメンヘテプ1世の祠堂レリーフ(PM II², 134; Gitton 1975, p. 16と表紙裏図)と由来不明の個人所有の石灰岩のステラ(Gardiner 1917, pp. 188–9)から、彼女が「神の手(Dr.t-nTr)」という称号も有したことが判明している。後者については、同時代ではなく、後代に作製されたと考えられる。神の手は、ハトホルやイシスなどの女神の異名としても知られる。創造神アトゥムが自慰行為によって神々を生んだとする神話(ピラミッド文書第527章など)が元になって、彼の配偶神と見做された女神がその名で呼ばれたと考えられるが、いつの時代からそうであったのか判らない。


¹⁶ Gitton 1975, p. 27.

¹⁷ 神妻については、Sander-Hansen 1940 が詳しく論じているが、扱う史料が限定的なため、Gitton and Leclant 1977 も参照するのが良いだろう。

 Drt-nTr「神の手」

 mw.t-nTr「神母」

 Hs.t/Smay.t aA.t「大いなる歌手」

 Hry.t wr.t xnr.wt tp.t「後宮の偉大なる筆頭」

同様の女性神官は他の都市の守護神にも仕えただろうが、その記録はほとんど伝わっていない。新王国時代のエジプト王位は伝統的に、女性王族が神と結ばれて誕生した男子に継承された。その意味で、理念上は女系なのだが、一方で兄弟である王とも近親結婚することで、継嗣は神と王の両方の血を受け継ぐとされた。事実上、男系で継承が行われたことになる。このような王権観を背景に、王の正妃や娘は神に嫁ぐことが求められ、神妻という称号が登場するに至ったのは必然だったと言える。上記の女性神官称号のうち、神妻がもっとも古くから知られ、すでに中王国時代には記録に残る¹⁸。もっとも、この時代の神妻が王族だった証拠はない。「神の崇拜者」や「神の手」は、単独で登場することもあるが、神妻と並記されることもあり、お互いに序列が存在したのか、あるいはいずれかが称号ではなく、女性神官を指す一般的な総称だった可能性もある。さらに、単に「歌手」や「(神の)後宮に属する者」ではなく、その集団の長(つまり管理職)としての称号にも多くが確認されている。これら全ては、お互いの別称である可能性もあり、時代を経て変容したものもあることを考えると極めて複雑で、系統や序列を簡単に示すことは甚だ困難である。また、異なる称号にも関わらず、神妻と混同するなど、研究者の間にも混乱が見られ、把握は容易ではない。

いずれにしても、イアフメス・ネフェルタリの場合は、アメンの第 2 神官と神妻は同列とされたが、そのような事例は他に確認されない。別に発表する予定の「古代エジプトの神妻 2」で述べるように、新王国時代が終わって第 3 中間期になると、第 1 神官を兼任するほど、神妻の地位は高くなり、未婚の女性王族に限った終身職となるなど、その専門化が顕著である。イアフメス・ネフェルタリの場合、世俗の王妃という立場は変わらず、神妻の称号を娘 2 人に生前譲与した可能性もある。あくまで第 1 神官に準じたことから、単に名誉称号だった可能性もある。彼女の母であるイアフヘテブもまた「アメンの神妻」の称号を有したことから、伝統に従って継承したのだろう¹⁹。もっとも、現存する史料のうち、このステラが第 2 神官を伝える最も古い記録である上、第 1 神官もまたイアフメスの時代より古く遡る例が確認されないため、アメンの神殿組織は、この時代から徐々に整備されていったと考えるのが妥当で、神妻がその枠組みに取り込まれたのも同時期だったようだ。先に述べたように、この時代に異民族ヒクソスがエジプトから排

¹⁸ 記録上、神妻の初例は第 11 王朝時代に生きたネフェルウという女性だが、王族ではなかったようだ(Newberry 1901, p. 221)。また、「神妻」と「神の手」は、中王国時代の女性イメレトネブエスの木像(Leiden D 127: Boeser 1905, vol. 3, p. 6, pl. 15)に同時に確認されるが、彼女が誰なのか不明である上、新王国時代に作製された可能性もあり、参考史料としての位置づけが難しい。

¹⁹ エドフ由来の記念碑(Urk. IV, 29: 13)。

除され、新たな統一王朝が出現した。国家安定と王権強化に伴った改革のうち、宗教もまたその一端を担ったと考えられる。王妃を至高神の配偶者として捧げることは、王家と国家宗教の結びつきを強化する試行の中で生まれたものだったと言える。

銘文は、同語でも決定詞や複数詞がある場合と省略される場合があるなど、一貫性に欠ける未熟さはあるが、文脈は捉えやすく理解は容易だ。また、文中に目録が挿入されるのは、第26王朝の神妻ニトクリスのステラと同じで、イアフメス・ネフェルタリのステラが模範になった可能性がある。

銘文

アメン・ラーの頭上:アメン・ラー、両土の玉座の主、天空の主。

彼がすべての[生命]、安定、支配、あらゆる喜びを与えんことを。

イアフメスの頭上:美しき神、両土の主、ネブペフティラー。

ラーのように命与えられんことを。

イアフメスの前:白いパンを捧げる。

イアフメス・アンの頭上:神の肉体より(生まれし)王の長男、イアフメス・アンク。


イアフメス・ネフェルタリの頭上:王女、王姉(妹)、神妻、偉大な王妃、

彼女のためになされる全てを命じる者、上下エジプトの女頭

[イアフ]メス・[ネフェルタ]リ。命あらんことを。

↑上下エジプト王ネブペフティラー、太陽の子イアフメス—永久に永遠に命あらんことを—陛下の[治世・・・]年、洪水季第4月、7日。↑町(テーベ)の地域の[偉大な判事たち(?)]とアメン神殿の神官(たち)²⁰の前でなされしこと。↑宮殿の陛下—命、繁栄、健康—が言ったことに従って。

「アメンの第2神官の位を神妻、↑偉大な王妃、白冠と融合せし者イアフメス・ネフェルタリ—命あらんことを—に[授けよう]。子から子へ、継嗣(から)継嗣へ(継承される)相続書²¹を彼女のために用意しよう。↑[彼女の]位に関して、永遠に、永久に、誰も彼女に対して[異論をさせないように]。↑[・・・行の大部分欠損・・・]人が見た↑[・・・行の大部分欠損・・・]私の前で。これに関わる目録:

²⁰  wn.(w)t Hw.t-nTr n.t Imn 「アメンの神殿の神官(たち)」。15行目の同語と異なり、単数形だが、ここでは複数として解釈する。

²¹ imy.t-pr 「家の中(のこと)」。相続文書を指す。

金: | 160 セニウ²²

銀: 250(セニウ)

銅: 銅でできた品 67、それぞれ 6 セニウ。私は彼女にそれを | 4 揃え、計 200(セニウ) 与えた。


ダイウ布²³200、400 セニウ相当。私はそれを 200(セニウ) 与えた。


髪のためのイフェド布²⁴(鬘?) 80、| 210 セニウ相当。それを 150(セニウ)と見做す²⁵。


メルヘト油 13 壺、78(セニウ)相当。それを 50(セニウ)と見做す。


総計 | 1010 セニウ。

私は彼女に男と女の召使いと、400 イペトの大麦と、5 アロウラの低地を | 1010 セニウに加えて与えた。彼女の地位(資産)は 600 セニウ相当である。彼女のための地位(資産)は以上で、完とす。¹³彼女は言った。『私はその取引に満足である。その通りに遂行させよう。¹⁴永遠に、永久にいかなる者もそれに対して異論をさせないように』²⁶。彼女はそれに関して誓った。『私の主が(私)のために生きる限り』と。¹⁵彼女のところに町の長官たち(?)²⁷とアメン神殿の神官たち²⁸がやってきて、神妻、偉大な王妃¹⁶ | イアフメス・ネフェルタリ―命あらんことを一としての地位を記した


²²  Sna は、sniw(あるいは Saty) のことだと考えられる。銀を基準にした重さの単位だが、詳細は不明。


²³  dAiw 一般的な「スカート」、あるいは「ショール」を意味するか(Janssen 1975, pp. 265–71)。dAiw には「5」という意味もある。

²⁴  ifd 大きな「シート」を指すか(Janssen 1975, pp. 291–2)。ifd には「4」という意味もある。

²⁵  Hsb n=s r 150 「それを 150 と考える」。

²⁶ nn rdi.t Xnn tw=s in rmT nb.t r nHH Hna D.t 「永遠に、永久に、いかなる者によって、それを邪魔させない」。

²⁷  読み方不明。22 行目に言及される imy.w-xt「臣下たち」、あるいは imy(-r) war.wt「行政官長」と読むか。

²⁸  wn.wt Hw.t-nTr n.t Imn 「アメンの神殿の神官たち」。2 行目の同語と異なり、ここでは複数形を示す。

29. (彼女は)私を与えたダイウ布 200 巾のうち、1 つの高価なダイウ布で身を包んだ³⁰。|¹⁷彼女は何も持たない孤児(のよう)だったのに³¹。そして、彼女のあらゆる願いのうち、私は彼女のために家を建てさせた³²。|¹⁸彼女の兄(弟)の彼女への異論なき奉仕として」。

|¹⁹彼女は高官たちの前で陛下のために神に祈って言った。「彼は何もない私に服を着せ、²⁰私に力を与えた。私が孤児(のよう)だったのに」。王自身の前で封がされた(契約)。|²¹彼のコイ[アク]の祭³³においてアメンの神像の前で相続書が[……。]²²南の[……。]で、王自身の前で、神妻、偉大な王妃イアフメス・ネフェルタリ—命あらんことを—の前で。²³[……。]の前で、一度に。陛下の側近たち³⁴|と臣下(たち)は³⁵集った。この神(王)は言った。「私は彼女の庇護者である。神妻イアフメス・ネフェルタリを除いて、来る世代において擁立されるいかなる王によっても、彼女に対する異論は永遠に起こらないだろう。永遠に、永久に、子から子へ、彼女の神妻としての地位と同様に、それは彼女のものである。²⁵私以外、誰も(異論を)唱えることはないだろう。他の誰かが言うことはできない」。

イアフメス・ネフェルタリの叙任には夫であり、兄(あるいは弟)であるイアフメスが深く関与した。ステラの記述は、彼が王として一人称で語る形式を採用する。彼は妻のために *imy.t-pr* 文書を用意させ、持参金も準備した。*imy.t-pr* とは「家の中(のこと)」の意で、相続文書を指す³⁶。そのうち、目録に記される 1010 セニウ相当の物品は、アメン神殿に納められたと考えられる。申告上よりも実物の価値の方が上回っており、王の気前の良さを伝える意図が透けて見える。目録に含まれない召使い、穀物、土地、家は、神妻としての王妃の生活を賄う実費として捉え

²⁹ *r sS tA iA.t rdi.ti Xr Hm.t-nTr Hm.t-nsw.t wrt laH-ms-nfr.t-iry anx.ti* あるいは、「神妻、偉大な王妃イアフメス・ネフェルタリ—命あらんことを—にこの地位を記した」とも解釈できる。

³⁰ 目録に記されるダイウ布を指す。ちなみに、ニトクリスの場合、彼女が身に纏ったのはパケト布だった。

³¹ *iw=s m nmH.t nn wny=s* 「彼女は何もない孤児の女だった」。

³² 神妻の家政機関は、カルナク神殿の北西に位置したと考えられる(神妻ニトクリスの首席執事イビの立像(Cairo JE 36158)にその修復が記録される)。

³³ *Hb=f n kA-[Hr-kA]* 播種季第 1 月に行われたコイアク祭のこと。

³⁴ *smr.w* ニトクリスの神妻叙任ステラでは、証人として登場するのは神官たちと *smr.w* である。

³⁵ *imy.(w)-xt Hm=f*

³⁶ この種の文書に関しては、Logan 2020 を参照して欲しい。

ることができよう。数世代後のハトシェプストの時代からは、「神妻の執事」という役職が確認されるようになるが、神妻の家政機関は徐々に整備されていったようだ。しかし、当時のアメン神殿と付属機関の規模は、決して大きくない。異なる時代を単純に比較することはできないが、イアフメス・ネフェルタリが与えられた土地の広さが5アウラ(11行目)なのに対し、第26王朝時代の神妻ニトクリスには3300アウラもの土地が寄進された³⁷。また、神妻叙任に当たって、それに異論が上がることを殊更に忌避する点は、この称号がまだ黎明期にあったことを窺わせる。

ちなみに、同母同父の妹、あるいは姉であるイアフメス・ネフェルタリのことを王が「何もない孤児」(17行目と20行目)だったと例えるのは珍しい。王が彼女を神妻に任命すると決定し、相続書を準備させたのは、洪水季第4月7日のことだったが(1行目)、神前で承認されるのは、「彼(アメン・ラー)のコイ[アク]祭」(21行目)だった。この祭は、政敵セトに殺された神オシリスが冥界の神となったあと、その息子であるホルスがセトとの戦いの末に王になった神話を背景にした祭儀だった。その主題は「継承」である。ネヘブカウ祭、ソカル祭などの別称もある。プトレマイオス朝のエドフでは、播種季第1月1日に「ホルスの新年祭」が行われたことが知られる³⁸。2つの出来事の間には24日の差があった。事務手続きと神による公式な認可は区別されたと考えられるが、このように祭礼で追認される文脈は珍しくない。例えば、第26王朝のプサメティコス1世の娘ニトクリスが神妻に叙任されたのは、治世1年、洪水季第2月14日だった。それは、カルナク神殿のアメン・ラーの前で行われた。記録中に祭礼への言及はないものの、トメス3世時代にオペト祭がこの日に行われたことが、他の史料から知られている³⁹。また、ラムセス朝になると、オペト祭は19日から行われるようになった。ニトクリスの神妻叙任は、この祭に合わせて準備されたことは確かだろう。また、第17王朝時代のエル＝カブの市長だったケブシは、カルナク神殿で発見されたステラに自分の職位を親戚である王子ソベクナクトに譲ったことを記録に残している⁴⁰。その日は洪水季第4月30日であり、imy.t-pr文書によって譲渡(売買?)が成立した。この契約は法に則って毎年更新されなければならない旨も付記される。また、宰相を含めた証人が臨席した場合は翌日の播種季第1月1日に設けられたとある。彼の一族の出自は王家で、宰相職も世襲によって継承したようなので、この取引が重要案件だったことは間違いない。言及こそないが、年に1度の更新とはコイアク祭のときにアメン・ラーの承認を必要とした文脈で捉えるのがよいだろう。

夫である王イアフメスの統治期間について、同時代の史料で確認できる最後の治世年は22年だが、マネトは「25年と4ヶ月」と記録している⁴¹。王のミイラは1881年にデール・エル＝バハリの隠し場(DB 320)で発見されたが、およそ25歳から30歳の間に死亡したと考えられている。ワディ・ハルファ出土のトメス1世治世1年のステラには、「ネフェルタリ」という名の王族女性が一緒に描かれることを根拠に、イアフメス・ネフェルタリが、イアフメス～アメンヘテプ1世～トメス1世の3世代を生き抜いたとの推測もあるが、妥当かどうか判断が難しい⁴²。彼女の

³⁷ Caminos 1964, p. 76, l. 30.

³⁸ Grimm 1994, pp. 66–7.

³⁹ Fukaya 2020, pp. 17–8.

⁴⁰ Cairo JE 52453 (PM II², 52; Helck 1975, 65–9; Logan 2000, 60–3).

⁴¹ Hornung 2006, p. 198.

⁴² Stela Cairo CG 34006 (PM VII, 141; *Urk.* IV, 80: 4; Lacau 1909, pp. 11–3, pl. 5).

ミイラもまたデール・エル＝バハリの隠し場(DB 320)で発見されたが、巨大な木棺に納められていたのは老齢の女性だった。彼女は少なくとも夫イアフメスの死後も生き、若い息子アメンヘテプ 1 世を支えた。イアフメス・ネフェルタリのと、神妻の称号は 2 人の娘イアフメス・メリアメン⁴³とイアフメス・サトアメン⁴⁴、あるいは親戚のサトカアメス⁴⁵に継承されたようだが、継承順位や期間は明らかでない。特に、イアフメス・サトアメンは、そのミイラの状態から判断して、子供のときに亡くなったと推測される上、サトカアメスの神妻称号は同時代の史料から確認できないため、死後贈与だったとも言われる。そんなわけで、当時の神妻の称号の継承には相当な紆余曲折があったことが窺える。

2. ラムセス 6 世の娘イシス


第 18 王朝の王妃イアフメス・ネフェルタリが神妻に叙任されて以降、歴代の王族女性はアメンの神妻を継承した。先述したように、彼女たちはあくまで世俗の王族に留まり、職業的な神官だった可能性は低い。その傾向がいつまで続いたのかも不明だ。そして、トメス 4 世の妃でアメンヘテプ 3 世の母だったムウトエムウィアを最後に第 18 王朝から神妻は姿を消す。ちなみに、彼女が王族出身だった証拠は確認されていない。また、アメンヘテプ 3 世の王妃ティイが神妻の称号を有した史料も見つかっていない。その後、アクエンアテンによるアマルナの神教改革による中断はあったものの、第 19 王朝に神妻は早速復活し、初代ラムセス 1 世の王妃サトラーはその称号を有した⁴⁶。

続く第 20 王朝でも神妻は継承され、ラムセス 3 世の王妃イシス・タネト・ヘムジェルトは神妻だった(下の系図を参照)⁴⁷。彼の王子であるアメンヘルケペシエフの母親もまた神妻だったが、その名は不明だ⁴⁸。同時に 2 人の神妻がいた事例はないので、王子の母もまたイシス・タネト・ヘムジェルトだった可能性もある。また、タネト・イペトという女性が「神の崇拝者」の称号を有し

⁴³ ヘルモポリス出土のステラ(PM IV, 168)。

⁴⁴ イアフメス治世 18 年の石灰岩ステラ(Hanover 1935.200.209)とカルナク神殿出土の第 20 王朝時代の書記ネブスウの砂岩ステラ(Cairo CG 34029: PM II², 294; Lacau 1909, pp. 63–4, pl. 22)。前者では王イアフメスと神妻イアフメス・サトアメンと一緒に描かれることから、イアフメス・ネフェルタリが生前に神妻の称号をイアフメス・サトアメンに譲った可能性もあるか。そうだったとしても、後者は若くして亡くなったようだ。

⁴⁵ ラムセス朝の召使いメンアメンのアビュドスの石灰岩ステラ(BM EA 297: PM V, 96; The British Museum, *Hieroglyphic texts*, vol. 6, pl. 33)とラムセス 2 世時代のカベケネトの墓(TT 2: PM I-1², 7 (10, I); LD III, pl. 2, a)。カベケネトの墓には、他にこれまでに知られていない神妻が少なくとも 3 人(タケレドカ(?), サトイルバウ(?), 名前不詳)が記録される。第 17 王朝後期から第 18 王朝初期の王族女性たちだと考えられるが、相関関係は不明。

⁴⁶ 王妃の谷 38 号墓(QV 38: PM I-2², 751 (3–4); LD, *Text*, vol. 3, p. 236)。興味深いことに、彼女は 「神母」の称号も有した。

⁴⁷ カルナク神殿で発見されたラムセス 6 世の片岩立像(Cairo JE 37331: PM II², 143; Monnet 1963, p. 226, pl. 27 B)。

⁴⁸ ラムセス 3 世の息子アメンヘルケペシエフ(B)の墓(QV 55)には、母親が「神妻、神母、偉大な王妃」だったと記録されている(PM I-2², 759 (3); KRIV, 370: 2–3)。この母親が誰かは不明。ピネジェム 1 世の妻ドゥアハトホル・ヘストタウィ(A)は、「コンスウ・パ・ケレドの神母」の称号を有した。このことから、「神母」は第 21 王朝までに名誉称号から神官号に変容したと考えられる(Jensen-Winkeln 2007, pp. 84–7 (28))。

たことが判明しているが、彼女はラムセス 3 世の娘だという説もあれば、ラムセス 4 世の妻あるいは娘という説もあり、血縁関係が定まっていない⁴⁹。その後の称号継承は不明確で、王朝の最後まで途切れることなく受け継がれたかはっきりしない。第 3 中間期(第 21 王朝～第 25 王朝)以降には多くの神妻が記録され、その権勢が勢いを増したことから、第 20 王朝末期まで神妻は脈々と受け継がれたのだろう。この間に神妻は世俗の名誉称号から変容したと思われる。その左証となるのが、ラムセス 6 世の王女イシスの事例だ。

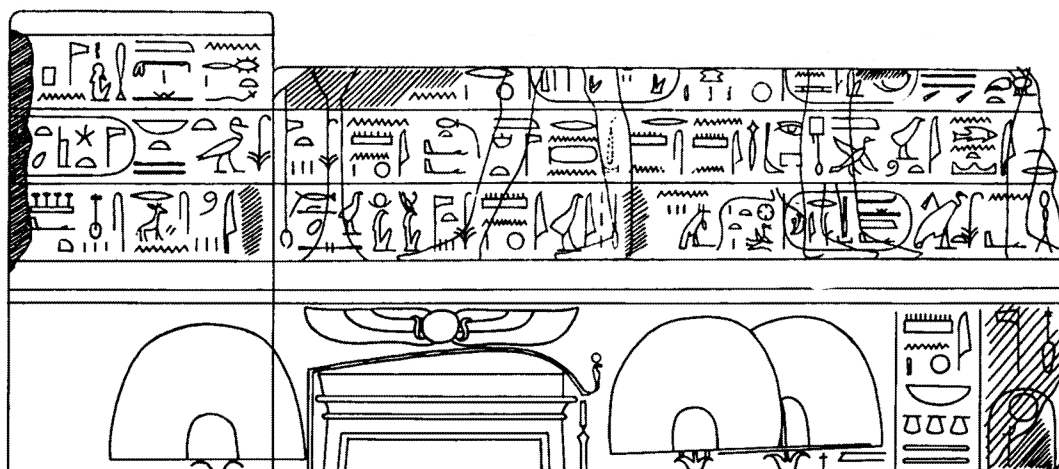
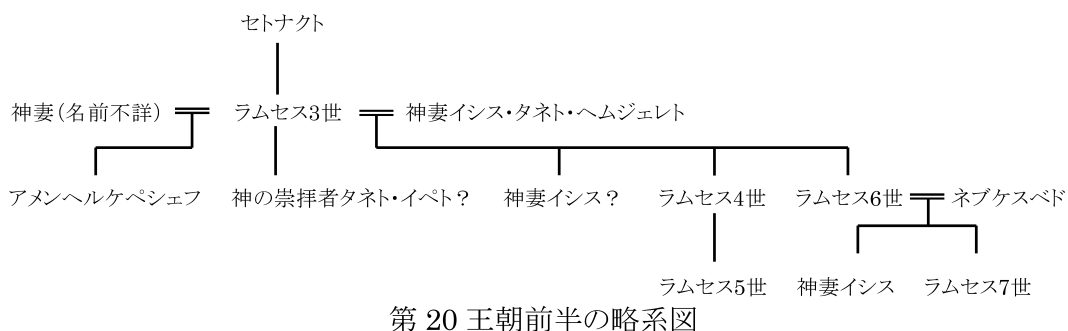


図 2. ラムセス 6 世の王女イシスの神妻叙任を記録するレリーフ
第 20 王朝、デール・エル＝バキトで発見、砂岩

(R. Lepsius, *Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien, Text*, vol. 3, p. 101 より)

イシスがアメンの神妻に叙任されたときの記録は、ルクソール西岸のデール・エル＝バキトに残っていた砂岩の 2 片の石塊に残る。建造物表面の一部だったと考えられ、部分的なレリ

⁴⁹ 王妃の谷 74 号墓(QV 74)の主。神の崇拝者の称号は、コンスウ神殿奥域に記録される (PM II², 242 (104, c); KR/VI, 77: 12)。

ーフと銘文が残る。19 世紀半ばにドイツ人研究者レプシウスがそれを出版したが、以降行方不明となり現在に至る(図 2)⁵⁰。そのため、遺物の大きさや記録の精度が確認できない上、碑文自体が元来レリーフのあった場所に上書きされるなどの改変を受けているため、解釈には十分な注意を要する。

本来、レリーフは上下 2 段に分かれていた。上段には神前に供物を捧げる王(と王妃?)が、下段にはアメン・ラーの神輿とそれを囲む扇があり、王がそれに向かって供物を捧げる様子が描かれていたと推測される。ところが、上段は後に横書きの銘文に置き換えられた。その上、一行目の王名がさらに改変を受けた可能性があり、その変遷は非常に複雑というより他ない。銘文を仮訳すると次のようになる。

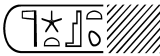
銘文

𓂏[¹…²数語不明…³上]下エジプト王、両土の[主]、[ウセル]マアトラーメリ[アメン]
⁵¹、[太陽の]息子、王冠の[主、ラムセス]・ネチェルヘカイウン。彼の実の[娘…¹
語不明…²のこ]の日、この神様の御前で、𓂏[¹…²数語不明…³彼の美]しき谷の
[祭にて]、アメンの大広間で、神妻、神々の王であるアメン・ラーの両腕清き者、
王女、両土の女主人、神の崇拝者、イシスの名を確固とせんがために、𓂏[¹…²数
語不明…³]王母ヘムジェレトと市長兼宰相ネヒイー声[正しき者]—とともに。神々
の王アメン・ラー、ムウト、コンスウは彼女に挨拶をし、[¹…²語不明…³]彼女のため
に素晴らしいことを[¹…²数語不明…³]まで予知した。

また、下段に描かれる神輿の前にある 2 行の縦書き銘文には次のようにある。

𓂏アメン・ラー、両土の玉座の主、[¹…²数語不明…³]

𓂏[¹美しき神、ウセルマアトラー…²数語不明…³]

王の娘イシスが神アメン・ラーの前で叙任されたとき、その位を近親の王族女性から継承した可能性は高いが、それが誰であったのかこの記録からは判らない。彼女の名  は、

⁵⁰ LD, *Text*, vol. 3, p. 101; KRIVI, 321–2.

⁵¹ これは、ラムセス 6 世の上下エジプト王名ネブマアトラー・メリアメンではない。ラムセス 3 世(ウセルマアトラー・メリアメン)かラムセス 4 世(ウセルマアトラー・セテペンアメン)の名が改変されたと考えられるが、誰がいつ行ったのか不明。ラムセス 6 世はなぜかこの部分は放置し、サ・ラー名だけを自分のために書き換えたようである。

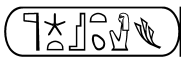
カルトウーシュの内に **dwA.t-nTr**「神の崇拝者」が含まれ、先述のタネト・イペト⁵²、ヘストタウイ⁵³、後述のマアトカーラーと同様である⁵⁴。彼女に関する史料は他にもう 1 例だけ存在する。それは、コプトスから発見された石灰岩のステラの上部で、現在マンチェスター博物館に所蔵されている(図 3)⁵⁵。中央で背を合わせて立つオシリスとラー・ホルアクティに供物を捧げる場面で、彼女は **r-pat.t wr.t Hs.w Hm.t-nTr n Imn sA.t-nsw.t 8wA.t-nTr As.t mAa xrw**「パアトの一員、祝福大いなる者、アメンの神妻、神の崇拝者インスー声正しき者」と記される。 という表記は、カルトウーシュの中に **dwA.t-nTr** が含まれる点でデール・エル＝バキトの碑文と同じだ。彼女の父は「王、両土の主ネブマアトラー・メリアメン、太陽の息子ラムセス・ネチェルヘカイウン(ラムセス 6 世)」、母は「彼(王)に愛されし正妃、両土の女主人ネブケスベド」と明記される。つまり、デール・エル＝バキトに記録されるウセルマアトラー・メリアメンは彼女の父親ではない。この名はラムセス 3 世を指す。



図 3. 神妻イシスのステラ(上部のみ残存)
ラムセス 6 世時代、コプトス出土、石灰岩
(F. Petrie, *Koptos*, 1896, pp. 16–7, pl. 19 より)

考えられるシナリオの 1 つは、谷の祭を描くデール・エル＝バキトのレリーフの制作を最初に命じたのは、ラムセス 3 世かその前の王だったことだ。その後、なんらかの理由でレリーフに横読みの碑文を上書きすることをラムセス 3 世が命じた。さらに、ラムセス 6 世時代に王名の一部が改変された。なぜ一部だけだったのか不可解だが、もっと重要なのは娘イシスと王母ヘム

⁵² 王妃の谷 74 号墓(QV 74: PM I-2², 768 (2); LD III, pl. 242e).

⁵³ PM II², 228 (12a, III); LD III, pl. 250c.

⁵⁴ コンスウ神殿前庭の梁などには、**Hm-nTr tpy n Imn** の称号を含むアメン大司祭ヘリホルの名前すべてがカルトウーシュで囲まれて記される(PM II², 232; Epigraphic Survey 1981, pls 136–46)。

⁵⁵ Manchester no. 1781 (Petrie 1896, pp. 16–7, pl. 19(下); PM V, 129).

ジェレットがラムセス 3 世とラムセス 6 世のどちらの家族だったかという点だ。図 2 にある 150 年前のレプシウスの古い挿絵を一見するところ、女性たちの名は改変を受けていないようである。このことを説明するために、両王共にイシスという名の娘がいたと説明する研究者もいる。つまり、同名の娘がいることに乗じてラムセス 6 世はこのレリーフを再利用したということだ。このような記録の篡奪はよくあることだったが、ごく一般的な女性名であるイシスと違って、ヘムジェレットと宰相ネヒの名は流用しづらい。ヘムジェレットは明らかに異国風の名前で出自は不明だが、先に触れたラムセス 3 世の正妃であり神妻だったイシス・タネト・ヘムジェレットのことだと考えてよいだろう。宰相ネヒに至っては、記録がほとんど伝わっておらず、いつの時代の人物だったか明らかでない⁵⁶。

これらの人物がすべてラムセス 3 世時代の人物だったとすると、王女イシスは彼の娘であり、母はヘムジェレットだった。つまり、コプトスのステラに登場するイシスとは違うことになる。そして、第 20 王朝時代にイシスの名を持つ神妻が少なくとも 2 人いたことになる。これに対して、彼女がラムセス 6 世の娘だったとすれば、付き添ったヘムジェレットは齢を重ねた祖母ということになる。このとき母親であるネブケスベドが不在なのは、すでにこの世にいなかったからかもしれない。いずれのシナリオも不自然ではないが、系図を見て判るように、ラムセス 3 世の家族には神妻、あるいは「神の崇拝者」の称号を持つ女性が複数いたので、後継者不足だったとは必ずしもいえない。また、この時代の記録は比較的多く、その中に宰相ネヒが一度も確認されないのは不思議だ。このことから、神妻イシスがラムセス 6 世の娘だと考えるのが一般に受け入れられている。どうあれ、イシスはヘムジェレットから神妻の称号と名前を継承した可能性が高く、神の崇拝者タネト・イペトは神妻に昇格しなかったと推測できる。母ネブケスベドは王家出身でなかった可能性があり、神妻の資格がなかったかもしれない。ラムセス 6 世にとって母ヘムジェレットは特別な存在だったようで、カルナク神殿で出土した王の立像には彼女が寄り添うように表現されている⁵⁷。

さて、ヘムジェレットがエジプト王の正妃として神妻の称号を有すると同時に次代の王の母でもあったのは、イアフメスの正妃イアフメス・ネフェルタリと変わらない。彼女らは後宮に住んだ世俗の妃であり、生前に神妻の称号を手放している。ところが、イシスが王に嫁いだことやいつまで生きたかは知られていない。史料上、彼女の次に確認できる神妻は、ラムセス朝後期の王の正妃だったティティである⁵⁸。彼女の夫が誰だったのかははっきりしないが、ラムセス 9 世か 10 世だと推定されている。イシスは王の正妃ではなく、王女の身分のまま神妻になり、その後も未婚だった可能性が高い。これは、第 18 王朝の女王ハトシェプストの夭逝した娘ネフェルウラー

⁵⁶ デール・エル＝メディーナ出土の跪座像 (Bruyère, *Rapport (1935–1940)*, 1952, p. 109, fig. 186; *KRI VI*, 349: 3) とアルマント出土の立像 (Mond and Myers 1940, p. 189, pls 18 and 105; *KRI VI*, 349: 14)。ラムセス 3 世時代には、ホリ (*KRI V*, 376–8)、ヘルウェル (O. Florence 2619, verso; Wolterman 1996; *KRI V*, 459: 15)、タア (*KRI V*, 378–80) の 3 人の宰相の存在が知られる。ラムセス 6 世時代には、ラムセス 4 世時代から在職していたネフェルレンペト (Helck 1958, p. 464, 22; Kitchen 1972, p. 190, n. 11) とラムセスナクト (O. Cairo 25344; *KRI VI*, 350: 3) がいた。

⁵⁷ Cairo JE 37331 (PM II², 143)。

⁵⁸ 王妃の谷 52 号墓 (QV 52) の主 (PM I-2², 757 (2))。

⁵⁹ヤトメス 3 世の娘メリトアメン⁶⁰以来、実に約 300 年以來のことだった。彼女は嫁ぐ間もなく若くして亡くなったのか。あるいは、ずっとテーベに居るつもりだったか。世俗の神妻である祖母ヘムジェトと王の名代である宰相ネヒに伴われて、遠く離れた当時の政治的中心地であるペル・ラムセスからテーベにやって来たときの心境はどうであったのだろう。祖母とは違って世俗を離れたとすれば、画期的なことだったはずだ。興味深いことに、100 年後の第 21 王朝の神妻のあり方を考えると、その可能性は否定できない。

政治的あるいは宗教的混乱の末、第 20 王朝が減びて第 21 王朝が始まると、エジプトは北部の政治勢力とテーベを中心とする南部のアメン神官団に二分された。このとき、神妻は王族ではなく、アメン大司祭ピネジェム 1 世の娘マアトカーラーに継承された⁶¹。彼女が配偶者を持った記録はなく、生涯未婚だったようだ。ピネジェム 1 世は大司祭でありながら、王も自称したことでも知られ、娘マアトカーラーも王族にしか許されなかった即位名ムウトエムハトを持った。それどころか、彼女は神格化さえされた⁶²。これ以降、神妻の称号は大司祭であれ、王であれ、その独身の娘が継承し、終身制となった。つまり、インスはその先駆けになった可能性もある。

おわりに

最後に付記として、興味深い史料を 1 例提示しておきたい。フランス国立図書館に所蔵されるパピルス文書 P. Bibliothèque Nationale 237 は、出土地などの由来が判っていないが、テーベ西岸で発見された可能性のある imy.t-pr 文書である⁶³。1 行目から 7 行目は一般的な物資配給の記録で占められるが、8 行目から最後の 20 行目までは次のような内容が記される。

治世 3 年、洪水季第 2 月⁶⁴18 日。この日、絵描き師たちと鋳物師¹⁰たちが名前を据えた⁶⁵。パケテム⁶⁶の穀倉にて、王ネブマアトラー・メリアメン(ラムセス 6

⁵⁹ センエンムウト像 (Berlin ÄM 2296: *Urk.* IV, 406: 8); セニメンの葬送用コーン (Berlin ÄM 1537: *Urk.* IV, 418: 15); スカラベ (MMA 27.3.325, 27.3.326, 27.3.328, 27.3.331, 27.3.333)。彼女は若いうちに異母兄弟であるトメス 3 世と結婚あるいは婚約していたと推測する研究もある。

⁶⁰ デール・エル＝バハリのハトホル像祠堂側壁 (PM II², 380; Naville 1907, vol. 1, p. 65, pl. 28 B)。

⁶¹ PM II², 228 (6–8, II, 3), 307 (27, III, 2); Jansen-Winkel 2007, pp. 10 (13), 17 (22a)。

⁶² コンスウ神殿の入り口には、テーベ三柱神にアメン・ラー大司祭ピネジェム 1 世が花束を捧げる場面が描かれるが、ムウトとコンスウの間に彼の娘であるマアトカーラーの小さな姿が付け加えられている (PM II², 228–9, (12d, II); *LD* III, pl. 250a)。

⁶³ P. Bibliothèque Nationale 237, Carton 1 (*KRI* VI, 339–40)。

⁶⁴ 原文では第 1 月と記されるが、直前までに登場する日付から判断すると、第 2 月に訂正するのが妥当だろう。

⁶⁵  名前を刻印した石か金属の記念碑のことを指す。

⁶⁶ テーベ西岸のデール・エル＝メディーナ付近にあった役所、あるいは集会所。

世)[の]名において[1 語欠損]¹³。|[…数語欠損…]、¹⁴|書記ホリシエリの子カエムヘジュと共に。¹⁵|アメン大司祭が¹⁶|王の執事ケドレンと¹⁷|財務長官メンチュウタウイと共にやってきた。¹⁸|神はお出ましになり、¹⁹|すべての高官たちに背を向けた⁶⁷。
²⁰|賢女の言ったことに従って。

短い記述だが、ラムセス6世に命じられたアメン大司祭がテーベ西岸に渡って、職人たちに王族の名を記した記念碑を作らせたことがわかる。誰を記念したのか不明だが、大司祭をはじめ王宮の執事と財務長官の立ち合いは特別なことで、この出来事は儀礼の文脈で理解するのが一番よいだろう。そして、洪水季第2月18日は、ラムセス朝においてオペト祭の前夜祭当日だったことから、この祭礼に関わる儀式だったと考えられる⁶⁸。オペト祭でアメンがテーベ西岸に渡るとは考えにくい、「神」が何を指すのか判らない。その「お出まし(xa)」とは、神像が神殿から運び出されることを指すが、その延長にある神意の疎通ができる状態も含意することが多い。ここではその場にいた役人たちに「背を向けた」と表現されることから、何かの質問に対して神像が特定の動作によって認否を示す神託儀礼だと考えられる⁶⁹。興味深いのは、記述の最後にドケットと呼ばれる奥付があり、パピルスを巻いた状態でもすぐに目につくだろう場所に記される。そこには、「王[…数語欠損…]によって作成された imy.t-pr 文書[の2つのうちの1つ]」とある。つまり、この神託は何かの相続に関わる契約を承認するために下され、王の介入を要するほど重大だったということだ。

結論を急ぐ必要はないが、この文書がラムセス6世の娘イシスと関わるとすれば、さまざまなシナリオが考えられるだろう。ここでは仮定に推論を重ねることは避けるが、「継承」、「祭礼」、「imy.t-pr 文書」の3つが交差するこの記録は、神妻に関連する史料の可能性もある。「賢女」の事例は少なく、どのような存在なのか不明だが、呪術師やシャーマンだと解釈されることもある⁷⁰。また、4行目に言及される女神ハトホルの美名として賢女が使われていると捉えることもできるかもしれない⁷¹。神妻を指す可能性も含めて今後の研究課題と位置づけ、次論に繋げたい。

⁶⁷  「彼は知者(女性形)の言ったことと同様に、すべての高官に対して背(尻)を投げた」。

⁶⁸ 祭礼に合わせて王の名代としてテーベを訪れる高官の事例はたくさんある。中でも、オペト祭と新年祭が重要視された(Fukaya 2020, pp. 9–11)。

⁶⁹ 他にも神像の動作が xr「倒れる」と表現される事例もある。神像が重くなる事象と解釈される(Kruchten 1986, pp. 76–7)が、一般的に多いのは神輿が前後に動くことや(Černý 1962, p. 43)、2片の相対する内容の文書を神前で選択させる方法も知られている(Ryholt 1993; Fischer-Elfert 1996; Kruchten 2000)。

⁷⁰ Helck 1984; Neureiter 2005.

⁷¹ Wb II, 446: 3–5.

引用文献

- Blackman, A. M. 1925: "Oracles in ancient Egypt I", *Journal of Egyptian Archaeology* 11, 249–55.
- Boeser, P. A. A. 1905: *Beschreibung der aegyptischen Sammlung des Niederländischen Reichsmuseums der Altertümer in Leiden*, 14 vols., Haag.
- The British Museum 1911: *Hieroglyphic texts from Egyptian stelae, etc., in the British Museum*, London.
- Camino, R. A. 1964: "The Nitocris adoption stela", *Journal of Egyptian Archaeology* 50, 71–100.
- Černý, J. 1962: "Egyptian oracles", in R. A. Parker (ed.), *A Saite oracle papyrus from Thebes in the Brooklyn Museum (Papyrus Brooklyn 47.218.3)*, Brown Egyptological Studies 4, Providence, 35–48.
- Epigraphic Survey 1981: *The temple of Khonsu II: Scenes and inscriptions in the court and the first hypostyle hall*, OIP 103, Chicago.
- Fischer-Elfert, H. W. 1996: "Two oracle petitions addressed to Horus-Khau with some notes on the oracular amuletic decrees", *Journal of Egyptian Archaeology* 82, 129–44.
- Fukaya, M. 2007: "Distribution of life force in the Festival of the Valley: A comparative study with the Opet Festival", *Orient* 42, 95–124.
- 2015: "Dates and precursors of the Opet Festival", *Bulletin of the Department of Philosophy, University of Tsukuba* 33, 100–126.
- 2020: *The festivals of Opet, the Valley, and the New Year: Their socio-religious functions*, Archaeopress Egyptology 28, Oxford.
- Gardiner, A. H. 1917: "A stele in the MacGregor collection", *Journal of Egyptian Archaeology* 4, 188–9.
- Gillam, R. A. 1995: "Priestesses of Hathor: Their function, decline and disappearance", *Journal of American Research Center in Egypt* 32, 211–37.
- Gitton, M. 1975: *L'épouse du dieu, Ahmes Néfertary: Documents sur sa vie et son culte posthume*, Paris.
- Gitton, M. and Leclant, J. 1977: "Gottesgemahlin", in E. Otto and W. Helck (eds.), *Lexikon der Ägyptologie*, vol. 2, Wiesbaden, 792–812.
- Graefe, E. 1994: "Der autobiographische Text des Ibi, Obervermögensverwalter der Gottesgemahlin Nitokris, auf Kairo JE 36158", *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 50, 85–99.
- Grandet, P. 2006: *Catalogue des ostraca hiératiques non littéraires de Deir el-Médineh X (no. 10001–123)*, DFIFAO 46, Cairo.
- Grimm, A. 1994: *Die altägyptischen Festkalender in den Tempeln der griechisch-römischen Epoche*, ÄAT 15, Wiesbaden.
- Harari, I. 1959: "Nature de la stèle de donation de fonction du roi Ahmôsis à la

- reine Ahmès-Nefertari", *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 56, 139–201.
- Helck, W. 1958: *Zur Verwaltung des Mittleren und Neuen Reichs*, PÄ 3, Leiden.
- 1975: *Historisch-biographische Texte der 2. Zwischenzeit und neue Texte der 18. Dynastie*, KÄT 6 (2), Wiesbaden.
- 1984: "Schamane und Zauberer", in *Mélanges Adolphe Gutbub*, Montpellier, 103–8.
- Hornung, E. 2006: "The New Kingdom", in E. Hornung, R. Krauss, D. Warburton, and M. Eaton-Krauss (eds), *Ancient Egyptian chronology*, HdO 83, Leiden, 197–217.
- Jansen-Winkel, K. 2007: *Inschriften der Spätzeit, Teil I: Die 21. Dynastie*, Wiesbaden.
- 2008: *Inschriften der Spätzeit, Teil II: Die 22.–24. Dynastie*, Wiesbaden.
- Janssen, J. J. 1975: *Commodity prices from the Ramessid Period: An economic study of the village of necropolis workmen at Thebes*, Leiden.
- Kitchen, K. A. 1972: "Ramesses VII and the Twentieth Dynasty", *Journal of Egyptian Archaeology* 58, 182–94.
- Kruchten, J.-M. 1986: *Le grand texte oraculaire de Djéhoutymose, intendant du domaine d'Amon sous le pontificat de Pinedjem II*, MRÉ 5, Bruxelles.
- 2000: "Un oracle d'Amenhotep du village sous Ramsès III: Ostrakon Gardiner 103", in R. J. Demarée and A. Egberts (eds), *Deir el-Medina in the third millennium AD: A tribute to Jac. J. Janssen*, Egyptologische Uitgaven 14, Leiden, 209–16.
- Lacau, P. 1909: *Stèles du Nouvel Empire*, Cairo.
- Logan, T. 2000: "The *jmyt-pr* document: Form, function, and significance", *Journal of American Research Center in Egypt* 37, 49–73.
- Mond, R. and Myers, O. H. 1940: *Temples of Armant: A preliminary survey*, 2 vols., London.
- Monnet, J. 1963: "Remarques sur la famille et les successeurs de Ramsès III", *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 63, 209–36.
- Naville, É. H. 1907: *The XIth Dynasty temple at Deir el-Bahari*, 3 vols., MEEF 28, 30, and 32, London.
- Neureiter, S. 2005: "Schamanismus im alten Ägypten", *Studien zur Altägyptischen Kultur* 33, 281–330.
- Newberry, P. E. 1901: "Extracts from my notebooks (IV)", *Proceedings of the Society of Biblical Archaeology* 23, 218–24.
- Ryholt, K. S. B. 1993: "A pair of oracle petitions addressed to Horus-of-the-camp", *Journal of Egyptian Archaeology* 79, 189–98.
- Sander-Hansen, C. E. 1940: *Das Gottesweib des Amun*, Historisk-filosofiske meddelelser 1 (1), København.

Wolf, W. 1931: *Das schöne Fest von Opet: Die Festzugsdarstellung im grossen Säulengange des Tempels von Luksor*, VESE 5, Leipzig.

Wolterman, C. 1996: "A vizier of Ramses III visits an oracle of Amun and Deir el-Medina", *Revue d'Égyptologie* 47, 147–70.